

# 山岳ガイドの身体性

—「勘」の分析試論—

岡村心平

## Exploring Mountain Guides intuition from an Embodiment Perspective

OKAMURA Shimpei

The mountain guide Tomio Saeki (1929–1990) worked in the Tateyama mountain range and served as a member of the first Japanese Antarctic wintering party in 1957. He was regarded as a man with outstanding senses who could predict the arrival of a storm by feeling the dryness of the wind or accurately locating his belongings buried under the snow after a blizzard. This paper explores the intuitions of mountain guides such as Saeki from an embodiment perspective. With regards to a guide’s bodily awareness, which results in a superior understanding of a situation as illustrated in the above example, the paper describes the guides’ consciousness of the wind through Tim Ingold’s weather-world concept. Similarly, mountain guides’ bodily sensations are explored by using Eugene Gendlin’s concepts of “felt sense”, “eaving” and “focaling,” as well as Arakawa and Madeline Gins’s concept of “landing sites”. Finally, the issue of a body’s habituation is explored in terms of the significance of the education of attention process. In conclusion, it was shown that the embodiment of mountain guides and their view of Arakawa’s perspective of the nature are of great importance in discussing the acquisition of intuition.

キーワード：山岳ガイド(mountain guides)、勘(hunch)、天候—世界(weather-world)、フェルトセンス(felt sense)、ランディング・サイト(landing sites)

## 1 山岳ガイドの「勘」をめぐる

1956年、日本初の第一次南極観測隊として観測船「宗谷」に乗り込んだメンバーのなかに、佐伯富男（1929-1990）という人物がいる。日本の極地研究家の第一人者である加納一郎、京大山岳部出身で生態学者の今西錦司、そして初代南極観測隊副隊長、越冬隊隊長となる西堀栄三郎という、このプロジェクトに関わっていた重要人物の3名から「要請」を受け入隊した富男は、観測隊員としてだけでなく、そのまま南極に残り越冬する11人の初代越冬隊の実働要員にも抜擢された<sup>1)</sup>。その選出理由は、彼が当時の日本において最も卓越した山岳ガイド、登山家であったからに他ならない。

富男は、富山県に聳える立山連峰の玄関口、立山町芦峯寺出身である。芦峯寺の立山ガイドの系譜についてまとめた鷹沢によれば<sup>2)</sup>、この地域に古くから住む佐伯一族は、飛鳥時代の佐伯有頼による立山開山伝説に端を発し、山岳信仰の拠点として栄えた雄山神社を支える山案内人として知られた人々であったという。一族からは、剣岳の積雪期初登頂に成功した「剣の文蔵」こと佐伯文蔵、同じく剣岳の山岳ガイドとして活躍した佐伯平蔵など、現在に至るまで山岳ガイドや山小屋経営者を多く輩出している。

実際、第一次南極観測隊には佐伯一族から他の複数の隊員が選出され、富男をはじめとする「佐伯五人衆」<sup>3)</sup>は、南極上陸後の本隊の拠点となる「昭和基地」の設営任務を遂行した。昭和基地は建築家の浅田孝により木質パネルによるモジュール構造を成しており、設営が容易なプレハブ工法により設計されたものである。これらパネル設営の予行演習は、富男らを中心として立山の山中にて実施され、南極においても彼の手によって迅速に構築されたという<sup>4)</sup>。

北海道大学農学部出身の富男は、在学中も山岳部として国内の数多くの山に登頂し、立山での山岳ガイドとして活躍した。南極越冬を果たした後も、北大時代からの旧友である三浦雄一郎によるエベレストスキー探検隊、北海道大学パタゴニア科学調査隊に参加するなど、多くの

1) 富男の起用を最初に提案した加納は、西堀への手紙の中で以下のように富男を評している。「佐伯富男は目に見えないところで、人のいやがる仕事を不満に思わずにやる。西堀さんがやってほしいことはどんなことでもやる。海外遠征にはなくてはならない男」（『芦峯寺ものがたり』208頁）。実直で知られた立山ガイドの中でも、富男の働きぶりは特に一目を置かれていたようである。

2) *ibid.*, p.18

3) 佐伯富男をはじめ、佐伯安次、佐伯栄治、佐伯宗弘、佐伯昭治の5名を指して探検終了後につけられた通称。全員が芦峯寺出身の山岳ガイドで、南極大陸近年のオングル島に昭和基地を設置するなど活躍した（鷹沢、2001）。

4) *ibid.*, p.215, 226

海外探検で隊員をつとめ、山岳地域での救助・搜索活動にも従事した。筑波大学講師、芦峯寺区長などを歴任、1990年には勲五等瑞宝章を授与され、『あるガイドの手記』『山と雪に生きる』など多数の著書を残している。

富男は特に極地における活動能力に優れ、空気の湿り具合、そして雲の動きなどから天候の崩れ、嵐の前兆などを察知する特異的な能力があり、南極越冬中も、ブリザードが基地周辺のすべての荷物を雪下へと飲み込んでしまった際、どこに何があるかその場所を正確に知っており、何食わぬ顔で平然と掘り返したという<sup>5)</sup>。

富男のもつ、この豪雪地域を生き抜くために不可欠なある種の察知能力、「勘」のような才覚は、多くの救難活動での実績や、彼の友好的な人柄とも相まって、当時の山岳同好コミュニティにおいては広く知られたものであった。登山史研究者であり作家の安川茂雄は、「トンコ」の愛称で親しまれた富男について以下のように評する。

トンコの嫌いな男は、私も嫌いだし、好きな人間は、私も不思議なほど好きなのである。トンコには、嫌いな人、好きな人といった識別に何か動物的なカンがあるようだ。私はトンコのそんなカンを信用する<sup>6)</sup>。

芦峯寺の厳しい自然環境で生まれ育った富男にとって、瞬時に、直感的に状況を察知する能力を身につけることは、生活上の知恵というよりも生き抜くための必須の要件であった。富男は『あるガイドの手記』の中で「おおくの仲間を失ったわたしたちにとって、雪は悪魔であり、憎むべき敵である。と同時に生活の一部である。(中略)おとなたちは、生活のためこの雪を克服し、利用して生きなければならない」と記述している<sup>7)</sup>。厳しい生活環境の中で培われた富男の特異的な「勘」の鋭さは、国内外の多くの探検プロジェクト、日々の山岳ガイドとしての安全な業務、悲惨な山岳事故・遭難現場における救助活動などで活かされたのであった。

日本における心理学の古典『勘の研究』で知られる黒田亮は、同書で「『勘』は時として『感』に置き換えられる<sup>8)</sup>」としており、「勘違い」などとして言われる、生活上誰にでも体験しうるような次元から、武道、剣法、芸事においてある動作の「勘を掴む」と呼ばれる際の経験、または禅などの東洋的な視点を含みながら、勘という概念について分析している。特に黒田は、

---

5) *ibid.*, p.230

6) 『あるガイドの手記』あとがき、314頁

7) *ibid.*, p.16

8) 『勘の研究』19頁

「勘」の字義をめぐる辞書的な語の比較・精査をする上で、いわゆる物事の要点を掴む際に言われるコツのことを指す「骨 (knack)」や、東洋思想や仏教における「覚 (comprehension)」という用語を類似の概念として想定したり、あるいは「識 (consciousness)」「直観 (intuition)」などの概念と対比させながら論じている<sup>9)</sup>。他にも「勘」や「骨」をかねたもの、かつこれに辞書的には「予言的直覚力の意味を寓せしめる俗語」としての "hunch" を取り上げている。いわゆる「虫の知らせ」や、一般的に「第六感」などの意味に近い。これらは黒田のいう「勘」の定義の射程の広さとその同定の困難さを示している。

富男のもつ特異的な「勘」の能力も、黒田のいう勘や虫の知らせなど、予知的で直観的な、得てして人智を超えたような能力をとして一般的に言い表されるものであろう。実際には、天候の悪化や雪崩の予兆を見逃さないある種の身体的な直感、「勘」がはたらくような場面は、富男だけでなく他の立山ガイドの間でもしばしば経験されており、例えばそのような天候の変化をめぐるある種の身体的な気づき (hunch) に「胸騒ぎ」という表現を用いている<sup>10)</sup>。なぜかはわからないが胸騒ぎがする。この何かよくわからない感覚を頼りに、登山のルートやタイミングを変更すると、本来ならそのあたりに差し掛かっていたであろうその時刻、その場所で、雪崩や崖崩れ、落雷などがあった、というようなエピソードがしばしば語られている。

事後的に「幸運が重なった」などと割り切ることもできるであろうが、優れた山岳ガイドはこのような体験をすることがしばしば語られ、特に富男はそのような勘の鋭さで知られた人物として評されたのであった。本論では、このような卓越した山岳ガイドが有する鋭い「勘」をある種の「身体知」として捉え、極限状況の中これらの身体知がどのように洗練され、またいかなる仕方で発揮されると論じられるのか、その特徴を身体論の立場から考察する。特に、環境と相互作用する身体の機能に着目したインゴルド、ジェンドリン、荒川+ギンズの理論的枠組みを参照しながら、極地を生き抜く山岳ガイドの「勘」を支える身体性について分析を試みる。

## 2 風と相互浸透する身体

高地・積雪地帯に暮らす人々、特に「山岳ガイド」を生業とする人々の身体性を分析した先行研究として、古川は著者『「シェルパ」と道の人類学』でヒマラヤ山脈エベレスト地域に暮ら

9) *ibid.*, p.22-24

10) 立山山岳ガイド協会創立100周年企画「立山ガイド 芦峠トーク LIVE 配信 !!」(youtube・2020年6月21日配信)において、立山ガイド協会会長の佐伯高男(佐伯富男の長男)は、自身が感じた「胸騒ぎ」により、ガイドコースを変更し、山腹での嵐を免れたエピソードを紹介している。同企画では他の山岳ガイドも同様の感覚によって天候の変化などを「予知」した体験談なども紹介された。

す山岳民族であるシェルパ族や、いわゆる職業としての「シェルパ」に関する人類学的な調査研究を展開している。特に、広義の職業的山岳ガイドである「シェルパ」にとっての道と歩くことをめぐって<sup>11)</sup>、人類学者のティム・インゴルドによる「天候—世界 (weather-world)」の概念<sup>12)</sup>、および人類学における生態学的なアプローチを参照枠として、彼らの暮らしやその身体性に迫っている。

まず「天候—世界」概念について概観する。インゴルドは我々を取り巻く環境を認識する際に、我々がその表面に住み着いている平らな「大地（地表面）」と、遙か上空に雲が浮ぶ広大な空間である「空」というような2つの区分、つまり大地と空からなる開かれた外の世界にいるという着想から始めることを採用しない。そうではなく、彼はこの世界を大気や水、砂などを含む媒介 (medium) の流動による動的な形成と変容のプロセスだと捉えており、その中には地上で暮らすあらゆる有機体、つまり我々人間も含まれる<sup>13)</sup>。

インゴルドによれば、天候とは空から大地へとただ降り注ぐもの、降りてくるものではなく、地表を変化させ、海を波立たせ、再び土や水を大気中へと舞い上がらせる。このダイナミクスの中に我々人間も存在している。またこのような環境の一元論的な視点に立てば、人間は決して野「外」にいるだけではなく、どこまでも風の「中」に存在しており、呼吸をして物質を交換しながら、この空と大地の流転する世界の「中」で生きているのである<sup>14)</sup>。

このような世界の捉え方をしたとき、私たち自身と世界との関わりを維持したまま世界を認識し理解するための一つの方略として、「風」という現象に着目することができる。優れた山岳ガイドや、自然の中で自然と共に生きる人々が、気候の変化のその予兆を空気の湿り気や雲の動きなどを風の中に認めることはすでに述べた。インゴルドは他にも、アラスカのコユコン族がキャンプファイアの突然の燃え上がりによって、嵐の到来を感じることに長けていたり、同じくアラスカなどの北方地域に住む先住民族のユピクの長老が、湖上に凍りついた雪の波紋や植物の房につく霜の向きから、卓越風の吹く向きを読むことができる、などフィールドワークの事例を紹介している<sup>15)</sup>。

---

11) 古川 (2020) によれば、山岳民族としてのシェルパ族と山岳ガイドという職業としての通名である「シェルパ」は必ずしも一致しておらず、シェルパ族出身でない山岳ガイドも外国人客に対して「シェルパ」を自称する場合がある。またガイドという職種においても、従事する業務や標高、収入などにより、ローカル・ポーター、トレッキング・ポーター、トレッキング・ガイドなど区分があるという (78頁)。

12) Ingold, 2000, 2007, 2011.

13) Ingold, 2007, pp.27

14) *ibid.*, pp.28-32

15) Bradly, 2002, Nelson, 1983

インゴルドは、居住者たちが周囲の環境に埋め込まれたある種の意味、アフォーダンスを知覚するというギブソンによる生態学的な視点には批判的な立場をとり、より関係論的な立場で論じる。むしろ、風や氷、木々などの媒介が動的に混ざり合い、相互作用・相互浸透するなか、その地域の居住者たちは天候世界の力動を生きていることをより強調する。居住者の身体もまた環境と動的に関わり合ってる。なぜなら、「風を感じるとは、外部としての周囲に触覚的な接触を図ることではなく、周囲と混ざり合うこと（170頁）」<sup>16)</sup> だからであり、つまり刻一刻と変化する環境の中で、特に極地のようなダイナミックな天候世界のうちで「風を感じるとは、すなわちこの混沌（commingling）を経験すること」に他ならないからである<sup>17)</sup>。

インゴルドは、状況を感じるということにおいて、主体と対象の区分を想定しない。山岳ガイドが嵐の予兆を感じる時、すでにガイドと嵐は区別された異なる存在としてではない仕方で成立している。「感じるとは、特定の個人や事物に対して身体的接触を図るやり方というよりも、自己とその周囲とのある種の相互浸透（interpenetration）である」<sup>18)</sup>。また世界を動的に捉えようとする多くのアニミズム的宇宙観において、息や呼吸、風の動きが重視されることは特に驚くべきことではない、とインゴルドは指摘する。「吸気とは息になる風であり、呼気とは風になる息である。呼吸における行き来の交代は、生命の本質である」<sup>19)</sup>。

呼吸という生命活動は、身体と世界との相互浸透そのものである。このことをインゴルドは、風の渦巻く開かれた世界に、呼吸をしながら生きることを、風が身体として「受肉化（embodied）する」だけでなく、身体が呼吸のうちに「受風化（enwinded）」するという独特の言い回しで<sup>20)</sup>、この風と身体との相互浸透、環境と身体とのあいだの不可分かつ動的なプロセスを表現しているのである。

山岳ガイドは、このような風の渦巻く開かれた世界に住み、自身が呼吸をする限りにおいて、風を感じ、嵐の気配を感じ、世界の動態を感じる。状況における何らかの兆しは、「胸騒ぎ」という仕方で身体にもたらされる。佐伯富男のような卓越した山岳ガイド達や、過酷な環境を生きる人々がしばしば経験する、前出のようなある種の「勘」とは、開かれた世界を生き、世界と相互浸透するその身体が、混沌とした動的な世界のその兆しを、風のうちに「感じる」ことによって支えられているのである。

---

16) *ibid.*, p.19、邦訳 p.170

17) *ibid.*, p.29、邦訳 p.181

18) *ibid.*, p.29、邦訳 p.181

19) *ibid.*, p.31、邦訳 p.183

20) *ibid.*, p.32、邦訳 p.184

### 3 フェルトセンスと状況についての理解

漠然と感じられる身体知を活用する方法として、心理療法家で哲学者のユージーン・ジェンドリンの開発したセルフ・ヘルプ技法、心理療法技法であるフォーカシング (focusing) がある<sup>21)</sup>。フォーカシングは、個人にとっての何らかの気がかり、問題や現在の状況について、漠然と感じられている曖昧な意味感覚をフェルトセンス (felt sense) と呼び、これに焦点を当てながら状況の意味について、新たな理解を探求する。問題解決に向けた単なる合理的な判断や、問題に伴う強い情動 (emotion) ではなく、言語化以前の感覚的で微細な「身体知 (bodily knowing)」を活用することが、フォーカシングの大きな特徴の1つである。このような身体性への言及は、現象学を主としたジェンドリン自身の理論的な枠組みにも見受けられる特徴である<sup>22)</sup>。

ジェンドリンもインゴルドと同様、我々の身体と環境との相互作用を重視する立場から自身の理論を展開させる<sup>23)</sup>。例えば先に言及した「呼吸」に関して、ジェンドリンは以下のように記述している。

呼吸においては、酸素は血液循環の環境の中に入っていく、全ての細胞の隅々まで行き渡っていく。身体とは環境の中に存在するが、同様に環境は身体の中にもあり、また環境とは身体なのである<sup>24)</sup>。

ジェンドリンは、物理的な身体と空間的な環境を区別した発想を採用せず、両者が密接に相互作用して、呼吸などのレベルまで含む生命プロセスが成立していると想定し、自身の理論を発展させている<sup>25)</sup>。その中で、身体が環境を「含意する (implying)」という独自の表現を用い

---

21) Gendlin, 1981/2003

22) ジェンドリンのプロフィールやその哲学的経緯、ジェンドリン哲学の特徴に関しては、三村 (2015) に詳しい。

23) ジェンドリンの哲学的名著の1つ『プロセスモデル』は「身体と環境は1つのものである ... (p.4)」という一節から始まり、身体と環境の相互作用プロセスがまず初めにあり (interaction first)、また両者がいかに相補的かつ精密に我々の生命プロセスを形成しているのか、行為や言語、創造性などの高次の活動もそのプロセスから生じるものと想定しながら、自身の理論を展開している (Gendlin, 2017a)。

24) *ibid.*, p.7

25) 『プロセスモデル』では環境に関して、環境1 (観察者が捉える外的で客観的な環境)、環境2 (生きている身体が直接相互作用する環境)、環境3 (蜘蛛の巣やビーバーの作るダムなど、生命活動の結果もたらされる新たな環境)、環境4 (可能性としてのみ成立する未既定の環境) の4つを導入しながら、詳細な議

て、この身体と環境の精密な相互作用の仕方を記述する。例えば、動物の脚はその動物が暮らす地面に適した形態をしており、脚をみればどのような環境で生きているのかが理解できる。つまり、動物の身体はその動物の生きる環境を含意しているのである<sup>26)</sup>。あるいは、菌の形状や消化器官の形態などにより、その動物がどのようなものを摂食するのをも、身体に含意されていると言える。

身体は物理的な環境だけでなく、生命のプロセスにおける次の展開も含意している。例えば、人間を含めある動物が空腹を感じているとき、その空腹は次の「摂食行動」あるいは「捕食行動」を含意している<sup>27)</sup>。空腹の度合いによって、何を摂食するか、あるいは動物によってはどのような対象の捕食行動を取るのかも、その空腹に含意されている。そして実際に摂食した後は、次は「消化」や「排泄」というさらなる次の生命プロセスが生起する (occurring)。このように、身体は次にやってくる何らかの「生起」を含意しているのである。このような事態をジェンドリンは「含意への生起 (occurring into implying)」と用語で概念化している<sup>28)</sup>。

ジェンドリンがこの「含意への生起」という用語で指摘している重要な点は、身体は物理的な環境との相互作用における空間的な含意だけでなく、次なる生命活動への含意、時間的な含意を有するということである。呼吸という生命活動は身体と空間との間の相互作用であるだけでなく、吸気が次の呼気を含意し、新たに生起した呼気が、次の吸気を含意している。吸気が浅ければ、次の呼気に影響を与え、その呼気は次の「深く息を吸う」という生起を含意する。同様に、「空腹とは、食べることの含意である」<sup>29)</sup>。空腹に含意されている、食べるという行為が生起するまで、もちろん空腹は維持される。もし維持されなければ、生命活動は停止する、つまり死を意味する。それまでの間に何かを口にすることができれば、つまり摂食が生起すれば、空腹感は回復され、さらに次の消化や排出の生起へとプロセスは進展する。生命活動はこのように、含意と生起による変化の連続であり、「...それ故に、含意は、含意における変化を含意する。含意はそれ自身の変化を含意している」<sup>30)</sup>。

呼吸や摂食という、根本的な生命プロセスの分析から、ジェンドリンは身体自身が自分自身の生命プロセスにおいて何が欠落しているか、次に何が必要かを知っている、つまり含意して

---

論が展開されている (ibid, p.6-8)。

26) ibid, p.7

27) ibid, p.6

28) ibid, p.10-12

29) ibid, p.10

30) Gendlin, 2017b, p.12

いるということを提示する。我々の身体は、我々自身の意識や認知の及んでいるものより、はるかに微細で背景的な次元で、豊かで暗黙的 (implicit) な知を有している。ある状況の変化から呼吸が変われば、脈拍が変化し、全身の生命活動が直ちに変化しているように、我々の身体はより多くの複雑なプロセスを含意している。ジェンドリンは論文『アラカワ+ギンズ』において以下のように述べる。

暗黙的な複雑さ (implicit intricacy) はどこにあるのだろうか。暗黙的な複雑さは、身体化されている (embodied)。私たちは内側から感じられる身体の中かに、暗黙的な複雑さを見出すのである<sup>31)</sup>。

刻一刻と変化する環境との相互作用において、我々の身体はその暗黙的な複雑さを直接的に感じることができる。暗黙的な複雑さは、我々が生きている状況についての次なる生起を含意している。身体は我々が生きている状況を直接的に感じ、暗黙的に理解しているのである。フォーカシングという実践において、我々が身体知を活用し、自身の状況の意味を理解することが可能になっている理由がここにある<sup>32)</sup>。

さらに言えば、ジェンドリンはこのような身体知は、決して呼吸や歩行中の足下などの身体に直に触れている部分にのみ成立すると想定しているわけではない。

私たちの人生や状況のある側面は、私たちが把握するのに先立って知覚されている。それらは、意味のある、何マイルも離れたところからのメッセージから成り立っている、より豊かなものである。私たちは皆、身体とともに状況を生きている<sup>33)</sup>。

身体によって暗黙的に理解されていることは、例えば視覚や聴覚が及ぶ範囲で把握されるにとどまらず、何マイルも離れたところにおいて生起しうる、生きている身体にとっての何からのメッセージですら、私たちに知覚されうる。それは身体が、インゴルドが強調していたように、世界と相互浸透しているからである。山の向こうから吹き下ろす風から、刻一刻と状況が変わる異変を感じとることを、山岳ガイドの身体は実践している。このような卓越した感覚は、一部の超人的な人間にしか備わっていないように思える。しかし本来的には、私たちは、そして

---

31) *ibid.*, p.169, 邦訳 p.389

32) *ibid.*, p.171

33) Gendlin, 2017a, p.167, 邦訳 p.386-387

私たちの身体は皆同様に、そのような動的な「天候一世界」、身体と環境の相互作用の中で生きているのである。

#### 4 状況における万事連関化と「胸騒ぎ」としての焦点化

インゴルドはこの開かれた世界について、風捲く混沌という特徴から捉えていたが、ジェンドリンは我々をとりまく環境をより秩序立っているもの (order) と捉え、以下のように表現している。

ある一つの生起には、あらゆる全ての差異、そしてこれらの差異によってさらにそれぞれ生み出された差異、さらにその差異によってふくまれた差異が含まれている。生起とは、全てのものによってすべてのものが相互に関連していること (an interaffecting of everything by everything) である (evev)<sup>34)</sup>。

ある事態の生起が、それとは区別された他のあらゆる事態 (everything) との相互影響により生じているという世界の様相を、ジェンドリンは「万事連関化 (eveving)」という言い回しを用いて術語化している<sup>35)</sup>。すべての事象は、他の事象の何らかの生起を含意している。この万事連関化という術語を用いることで、山岳ガイドが感じる嵐の予感、「勘」について検討することができる。それは、佐伯富男ら卓越したガイドが時として感じる「胸騒ぎ」の生起を、万事連関化という視点で捉えるということである。

なぜ山岳ガイドたちは、遠く何マイルも離れたところの天候を、しかも往々にして「今はまだ」起こっていない、将来生じうる嵐の前兆を、身体的に感じることができたのか。実際には事後的に嵐が起きたことが示されるとしても、山岳ガイドの身体が嵐を感じることをどう説明できるのか。ジェンドリンは万事連関化に続いて、状況の身体的な理解を示すための「焦点化 (focaling)」という用語を導入する。

私たちのモデルでは、生起はそれ自体の次の生起に関する含意をもたらし、変化させる。

34) *ibid.*, p.41

35) “everything by everything” という語の短縮系 “evev” を進行形 (ing) を組み合わせ動詞化したもの、このように、独自の用語を想定し、それを動詞化してプロセスの記述に用いるという方略は (inging) はジェンドリン哲学の特徴の1つである (Gendlin, 2017, 岡村, 2019)。なお万事連関化という訳語は諸富・村里・末武編 (2009) で用いられたものを採用した。

身体自身の有する含意は、多くのプロセス、1つの含意への多くの部分や差異の焦点化 (the focaling) である。目的や方向性というものはプロセスの諸側面である。この目的というものは、与えられた何かなのではない。例えば、人間をめぐる出来事の中で、私たちが「目的」と呼んでいるものは、私たちに与えられた行動のうちに、すでに本来的に備わっているものである。(中略) 植物が太陽の方向を向くことに個別の目的など必要ない。目的を個別的なもの、与えられたものにすることは人為的なことである。通常は、その「目的」が何であるかを言うことは人為的である。<sup>36)</sup>

多くのプロセスを含意している身体において、ある1つの生起が焦点化され、与えられる。例えば刻一刻と変わりゆく山岳部の天候の変動のなかで、何かある「胸騒ぎ」が焦点化されるとする。そこには多くのプロセスの諸側面が焦点化されたものである。ただし、そのような胸騒ぎが何によるものなのか、その理由や根拠は、目下のところ明確にはならない。それはあくまで感覚のうちに含意されているに過ぎない。しかし、植物が太陽にその葉を向けるように、山岳ガイドの身体に、その「胸騒ぎ」が生起されることになる。後になってようやく、「あの時の嫌な予感嵐の前兆だったのか」と、当の山岳ガイド本人ですら、人為的に理解するに至る類のものである。

事後的にはじめてわかるというような、この状況の理解をめぐる奇妙なプロセスは、フォーカシング実践などカウンセリング場面でもたびたび見受けられるが、何らかの芸術制作過程や、創造的な活動を行う際にも体験されうる<sup>37)</sup>。『プロセスモデル』においてジェンドリンはこのような場면을記述している。

芸術家は、ありうるすべての間違っただ線を引いては消してを繰り返してみ、そこから正しい線を「選び出す」というようなことはしない。幾何学的には、平面上には無数のラインが存在すると言えるが、そのような線は実際には存在しないし、最終的に描かれるはずの線ですら、そこには存在しない。すでに描かれている線（そしてそれ以上のもの）が、「必要とされている」まさにその線の形成（万事連関）に関与しているのである。その線が

---

36) *ibid.*, p.45-46

37) ジェンドリンは引用した画家の描く線の例だけでなく、カウンセリング場面において見られる内省と洞察場面だけでなく、詩作における新しい表現の到来などを、身体感覚（フェルトセンス）によりもたらされる創造的なプロセスの例としてしばしば取り上げる。特に『プロセスモデル』においては、ダンサーのイサドラ・ダンカンによる振り付けの創造過程の描写がその例示として用いられている (*ibid.*, pp.198-199)。

やってくる時、その線はある1つの含意を進展させるように、それまでに描かれている全ての線の相互関係を変化させる。何らかの目標も、その線も、あらかじめ存在するわけではない。芸術家のある一つの含意は、その他すべての描線のもつそれぞれの関係性の万事連関化 (eveving) である。芸術家は正しい線を焦点化 (focals) するのである。<sup>38)</sup>

画家は、自身の作品の1本の描線を引く際にも、自身が描くことのできる無限に近いすべての線を参照することもなく、まさにその絵が描かれるために必要とされる線を引くことができる。その線を引くという事態の生起は、すでに紙面に描かれた、あるいはこれからも引かれうるすべての万事連関化であり、その絵をめぐる数えきれないすべての諸側面が「焦点化 (focaling)」されたものとして、画家は一本の線を引くことができる。おそらく画家は、その線を引く理由や目的を説明できないだろう (あるいは説明できたとしても、それは人為的な後付けとなるだろう)。

卓越した登山家や山岳ガイドもまた、このような感性の焦点化により線を引くことのできる画家と同様に、多くの可能性の万事連関化から、ある一つの行為を行うことができる。登頂ルートを変更する、キャンプの設営位置を変更する、下山を決定する... これらの選択の意味は、事後的に、人為的に説明しうるかもしれない。たとえそれが「胸騒ぎがする」という理由だったと後に理解できたとしても、その時、山岳ガイドの身体に焦点化され、身体化された万事連関は、状況全体の何らかの混沌のなかで、生き残るために必要な何らかのメッセージの欠片に直接的に触れている。「焦点化の方向性とその結果は、含意から到来する。万事連関化 (それぞれの事態がすでに他のものへの影響を受けていること) とは、焦点化することであり、これは次なる一歩についての一つの含意において到達する」<sup>39)</sup>。

ジェンドリン哲学の観点から言えば、過酷な環境下で到来するある種の「勘」や「胸騒ぎ」は、風を感じる山岳ガイドの身体において焦点化された万事連関であり、状況についての暗黙的理解 (implicit understanding) だと捉えられる。創作活動において芸術家はその手を止め、次に書くべき線やフレーズの到来を待つように、ガイドの「胸騒ぎ」はその歩みを止めさせ、その世界で生存するためのさらなる一歩を到来させるのである。

---

38) *ibid.*, p.46

39) *ibid.*, p.47

## 5 注意の教育と「勘」の身体性

では、このような「勘」の鋭さ、状況の変化によって焦点化される「虫の知らせ」の感受力というような稀有な能力が、一部の芸術家が持つある種の才覚として実際に存在し、佐伯富男のような一部の卓越したガイドに分有されているのだとしたら、それはどのような仕方で培われているのだろうか。芸術家の持つそれは、一部の人のみに与えられる天賦の才能であるのか、あるいは教育やトレーニングによりある程度向上が認められる能力なのだろうか。

先述の古川は、広義のシェルパからヒマラヤの山岳ガイドたちが、変化に富む山道自体を覚え、そこを歩くという身体運用の熟達されていく過程を分析する上で、環境の中で「体で覚える」という事態を捉えるために、インゴルドの「注意の教育 (education of attention)」という用語を援用する。これはインゴルドが、ギブソンのアフォーダンス理論において現在の経験知覚と過去の記憶経験の区分に関して言及する際に用いた言い回しである<sup>40)</sup>。古川も引用し指摘しているインゴルドの記述は以下の通りである。

人はある文化に適切なやり方で知覚することを学ぶ。それは感覚データを高次の表象に組織化するためのプログラムや概念的枠組みを獲得することによってではない。これを守備よくこなすために、環境の特徴的な側面に気づき、滑らかに反応する実践的な能力 (a practised ability to notice and to respond fluently to salient aspects of the environment) が必要とされる、日々の作業における実地訓練 ('hands-on' training in everyday tasks) によって学ぶ。つまり、学ことは情報の伝達ではなく — ギブソンの言葉を借りれば (Gibson, 197: 254) — 注意の教育 (an education of attention) である<sup>41)</sup>。

このように、人間がある状況において的確に反応する能力を身につけることは、実地的な訓練において学ぶことに他ないが、その時に人が学んでいるのは、何らかの感覚データの情報処理プログラム、つまり何からの情報伝達の仕方ではなく、ある種の「注意の向け方」である。

40) 「明らかに、情報抽出理論は記憶を必要としない。それは記憶を通じて過去経験が現在経験に及ぼす効果を基本的公準とする必要がない。それは、学習すなわち練習および注意の教育 (the education of attention) による近くの向上を説明する必要はあるが、その際、過去経験のがらくた入れとか記憶の混乱とかに訴える必要はない」Gibson, 1979/2015, p.243, 邦訳 p.269, 一部訳語を改訂。この部分は次節「積雪とランディング・サイト」における雪下の物資の知覚の議論ともその関連を指摘できる。

41) Ingold, 2000, pp.166-167, 訳出は古川, 2020, p.32を参照に一部訳語を改訂。

古川の指摘の通り、「固有の有機体としての人間が山岳地帯で生き抜くためには、固有の注意の向け方を学び、環境から類似したアフォーダンスを知覚することが必要」であり、実際に古川は、シェルパ族や職業としてのシェルパがいかにかこのような山岳地域特有の環境への「注意の向け方」（道の認識の仕方、道の歩き方など）を獲得、あるいは共有しているのかについて、事例をもとに詳細に分析しそれらを例示している<sup>42)</sup>。

佐伯富男や立山の山岳ガイド達が示す「勘」の良い、「胸騒ぎ」を知覚する身体もまた、芦峠寺地域の苛酷な環境での「実地訓練」により鍛錬されたことは確かであろう。では、実際のところ、このような勘の鋭さはどのようにして研ぎ澄まされていくのだろうか。

もともと、ジェンドリンの考案したフォーカシングは、カウンセリングの効果研究において、身体感覚に注意を向けながら話をする来談者（client）が、心理療法を効果的に利用できる、という知見をもとに開発された経緯がある<sup>43)</sup>。一方で、うまく身体感覚に注意を向けられない来談者は心理療法面接を活用できないことが想定されるため、このような来談者に、身体感覚への「注意の向け方」を教えることが要請された。そのために考案されたのがフォーカシング簡便法であり、そういった意味ではフォーカシング実践はまさに、状況についての曖昧な身体感覚への「注意の教育」である。つまりフォーカシングは、一部の卓越した才覚に恵まれた人物にのみ与えられているように思われがちな身体知を、誰しものが「注意の教育」を受けることにより習得できるという考えを前提とした技法である<sup>44)</sup>。

富男の持っているような卓越した身体知が、どのように熟達されていくのかを理解することは、「勘」や「胸騒ぎ」という一部の人にしか恵まれていない才覚と思われがちな才覚を広く誰しものがアクセスできるある種の「資源」として活用していく視点を我々にもたらす。卓越した能力である山岳ガイドの「勘」と、我々でも気づきうる身体知とを交差させるために、富男の山岳ガイドとしての身体性がいかに培われてきたのか、彼の幼少期の記述を追うことにしよう。

## 6 積雪とランディング・サイト

先述のように、雪のなかの生活において雪の特性を知ることは、居住者にとって文字通りの意味で死活問題である。そのため、雪の積もり方をじっと観察したり、適応した装備を考え出

42) 古川、2020、第2章と第6章を参照。

43) Gendlin, 1981/2003を参照。

44) フォーカシングを含む人間性心理学分野では、人間の持つ創造性を一部の天才の有する限定的な能力としてではなく、誰しものが自己の成長、自己実現傾向において発揮できる能力であると捉えている。詳細は岡村（2017）を参照。

し、それを巧みに使いこなすことが一つの習慣にならざるを得ない。

芦峠寺などの降雪地域では、どこの家庭でも庭に藁をかぶせて野菜などを貯蔵するという。雪が訪れると一面真っ白になり、その一面に貯蔵された野菜の位置を覚え掘り起こす仕事、子どもたちに与えられた一つの役目である<sup>45)</sup>。山に仕掛けたウサギ用の罠なども一夜にしてすべて埋れてしまうが、子どもたちはその位置を簡単に掘り当てる。「雪との戦いは、まず、記憶力の養成からはじまると言っても過言ではない」のである<sup>46)</sup>。このような習慣を身につけていたことは、富男が極地の探検において優れた能力を発揮する礎となっているという。

昭和三十二年、南極の昭和基地に越冬したとき、ブリザードによって一夜のうちにすべての荷物が雪の下になってしまった。しかし、子どものときからの習慣で戸外の物のあり場所を頭の中におさめていたので、やれ、あの機械はここだ、何々の缶詰はあそこだと、他の人たちに教えて、自分は掘り出し作業を免れている。雪のなかの生活では、記憶力の優れている子どもがいつもガキ大将になる<sup>47)</sup>。

これは決して、当てずっぽうという意味合いでの「勘」で、雪を掘ったり言い当てたりしているわけではなく、富男は雪中の荷物の位置を「知っている」のである。富男はこの能力を「記憶力」と表現しているが、これは単に雪が積もる場面をイメージ画像のように記憶しておけば成り立つという代物ではないだろう。物の位置を正確に覚えるだけでなく、一面雪に覆われている場所に正確に自身の記憶した物の配置をプロットする必要がある。もちろん、埋れた雪下の物を正確に把握し、取り出すというこのような身体知は、雪に埋れた側溝や罠などの危険物を把握する役割も担っている。

生存のために状況を察知するこのような働きは、現代美術家で、サイエンスとアートの融合を目指し「コーデノロジスト」を標榜した荒川修作とマドリン・ギンズ（以下、荒川+ギンズ）のいう環境との関わりである知覚的行為を特徴づける「ランディング・サイト (landing site)」という発想から捉えることができる<sup>48)</sup>。環境と相互作用している身体（有機体）において、何ら

---

45) 佐伯、1973、17頁

46) *ibid.*

47) *ibid.*

48) ジェンドリンとマドリン・ギンズは生前に交流があり、相互に思想的な影響関係があったことが、東西学術研究所身体論研究班の遺稿研究の結果から明らかになりつつある。両者の関係やその詳細に関しては、例えば三村（2017）および岡村（2019）を参照。

かの認識や出来事が生じる際、それは必ず世界において場所化 (sited) されている。認識することは世界に降り立つ (landing)、つまりある種の行為である。これは単なる空間的な把握ではなく、我々の行う認識自体が、本来的に場所化されており、同時に降り立つという行為であることを示している。

荒川+ギンズは、このランディング・サイトをめぐる3つの区分を提示する。実際に目の前にある物を知覚する際に生じる「知覚するランディング・サイト」、知覚的には把握されはしないが、イメージ化する領域において生じ、知覚を支える働きも持つ「イメージ化するランディング・サイト」、そしてこの2つのランディング・サイトが相互浸透し、知覚とイメージが複合することで我々の世界の捉え方に「奥行き (depths)」を提供する「次元化するランディング・サイト」である<sup>49)</sup>。

佐伯富男において卓越的な、雪下の物の位置を正確に把握する能力は、知覚とイメージの融合により、状況内の「場所化」が成立する「次元化するランディング・サイト」の好例であると言える。実際には見えない降雪前の記憶イメージに支えられ、富男は南極のブリザードの後のあたり一面の雪面に、荷物を知覚する。他者には二次元的な雪面に、奥行き、深さを経験する、つまり雪面に「三次元的な経験を成立させる」のである。

荒川+ギンズはこのランディング・サイトの働きを示す例として、難解と言われたポリオミノ・パズルを解いた盲目の数学者ダルケを引き合いに語っている。イメージの作用により非常に精密な三次元的な場所化を成し遂げたダルケと同様に、富男は見えない雪下の荷物を精密に捉えることができるのである。<sup>50)</sup>

荒川+ギンズは、このような「ランディング・サイト」を賦活化するために、「建築」という手法に着目し、実際に人がその身を持って、つまり建築的手続きによる手続き的知を通して体験するために、『奈義町・龍安寺・建築する身体』(岡山県奈義町)『養老天命反転地』(岐阜県養老町)『三鷹天命反転住宅』(東京都三鷹市)『バイオスクリーヴ・ハウス』(アメリカ合衆国・ニューヨーク州)などの建築物を構築した。そこでは、水平面の一切ない凸凹した床や、色鮮やかな色調などの多様な次元の刺激を提示することを通して、身体に揺さぶりをかける。そのねらいを、荒川+ギンズは以下のように記している。

「ひと」は環境——つまり、感覚として一挙にとらえられるもの、慣れ親しんでいる社会＝

49) Gins and Arakawa, 1997, 17-21頁、荒川+ギンズのランディング・サイトのに関する概観は三村 (2017) も参照のこと。

50) Gins and Arakawa, 1997, pp.14-20

歴史的な母体によってガッチリと守られているもの、そして以前の出会いからもたらされるもの、それらの総体——と出会う。(中略) 見知らぬ物を絶えず慣れ親しんでいるものに変えていくことによって、つまり、絶えず環境を慣れ親しんでいるものにするによって、誰もが前に進んでいるのだ。この習慣的にかつ死をもたらすプロセスをくつがえすには、2つの方法がある。1つは、環境を極めて濃縮して発展させることで、慣れ親しんでいるものに負荷をかけ、それを見知らぬものにしてしまうことである。もう1つは、身体を酷く、そして執拗にアンバランスな状態に投げ出し、肉体の努力の大半がバランスを取り戻すために使われ、慣れ親しんでいるものの社会=歴史的な母体の日常の取りまとめのための、つまり「ひとらしく」あるための力が残っていないようにしてしまうことである。<sup>51)</sup>

荒川+ギンズの企ては、我々の環境への慣れ親しみ(慣習的で死をもたらすプロセス)を、環境の濃縮(建築的手続き)によりその「慣れ」を崩してしまうこと、そして身体を極めてアンバランスにすることで、我々が「ひと」である(人間化する)ことを維持している余力を奪うことで、「ひと」を超える存在へと天命を反転させることである。そのために荒川+ギンズは、凸凹の床や完全な球体の部屋、四つ足でないと登れない斜面など、過酷な環境を我々に提供する。

現代の人工的な環境への「慣れ」が身体へともたらす悪影響については、富男もある遺稿の中で書き残している。昭和63年ごろ友人にあてた手紙の中で富男は、直近に立山の剣岳で事故が多発していることに触れ、現代人がアルファルトの道や車社会へと移行したことで、「足のウラの感覚が石ころや雪に対抗できなくなってしまった」「足のウラの動物的感覚が失われた以上、こんな事故が起こるのは当然」と記している。続けて富男はこのように記述する。

現代社会の環境が、いろんな事故に関係しているものと思います。たとえば私の村は4ヶ月雪に埋れますが、誰一人足を滑らしてケガをした人はいません。ところが東京に10センチの雪が積もったらケガ人続出です。足のウラの感覚が反応しないことです。山の遭難も間接的な原因を追求すべきであり、登山者も入山前はトレーニングといっても、足の裏の感覚の回復すべきと思います。<sup>52)</sup>

先述の『養老天命反転地』においても、オープン当初は来場客が足を滑らせ転倒し、ケガ人

---

51) 荒川+ギンズ、1995、8頁

52) 佐伯、1995、118-119頁

が続出したが、当の荒川は「案外少ないな」と述べたという逸話がある。雪面や斜面など滑りやすい地面を難なく歩く行為がある種のランディング・サイトを伴った行為と捉えれば、立山の芦峯寺の雪のなかの過酷な生活は、身体的能力を賦活化する環境であるに違いない。

実際に、山岳部、特に山小屋での生活の数日～数週間続けることは、我々の身体的な感覚や状況の認識に変化をもたらすと言われており、言葉がうまく出なくなったり、数が数えられなくなる「山ぼけ」という言葉が知られている<sup>53)</sup>。立山山中の黒部源流部で山小屋を経営し、山岳ライターとして知られる伊藤は、山の環境に長期滞在し、身体が順応してから下山すると、アスファルトの道が滑りそうで怖いと感じられるという。「なめらかすぎて、どちらの方向へでも滑っていきそうで危ないような気がする」<sup>54)</sup>。これは単なる筋力量の変化に伴う問題ではなく、身体の変化に由来する環境の認識の変化、ランディング・サイトの変容であろう。山中、あるいは雪面を歩くとき、脚はブーツやかんじき越しではあるものの、直接的に地面に触れる。地面に触れることは、同時に地面を認識することでもある。山の環境に適応し、感覚の回復した足のウラは、例えば「どこまでも滑っていきそう」というイメージのランディング・サイトが賦活することで、そこに予見される危険をさらに次元化するのである。

一方で、たとえ山中で暮らしていたとしても、次第に身体はその環境に「慣れ」親しんでいく。実際に、富男の手記には、同じ芦峯寺出身の同士や山岳仲間が遭難したり、活動中の事故に巻き込まれ、怪我や命を落とした例が詳細に語られている。実際の山岳地域での暮らしでは、毎日が身体知の発揮を試される「実地訓練」であるだろう。これは環境からの影響をいわば「濃縮」して再現された荒川+ギンズの建築作品においても同様であり、そのため岡村が指摘するように、彼らの天命反転建築の多くで、慣れをリセットするための「使用法」などの仕掛けが用意されている<sup>55)</sup>。

山岳部や極地での活動中は、環境への適応、恒常的な環境の確保が最重要課題である。一方で、環境への「慣れ」は、環境の微細な変化に気がつく (hunch)、その感受力の低下においても起こりうるものであり、字義通りの意味で「命取り」になりかねない。環境との相互作用の仕方を絶えず更新しつつ、環境に開かれ、そこに立ち現れる「気配」を感受し続ける身体は、

---

53) 伊藤、2019、214-215頁

54) *ibid.*, p.214

55) 岡村、2019、152頁。なお、本項における「慣れ」への言及は、2020年9月4日にオンラインで実施された「2020年度 第2回東西学術研究所身体論研究班 研究例会」における染谷昌義氏による岡村論文への批評およびその後の全体への議論がその着想を一部となっていることを記しておきたい。

生存し続ける可能性が高くなるだろう<sup>56)</sup>。「慣れ」とは注意に割くコストの削減であり、注意の向け方の可能性を狭めることにつながるからである。もっとも、荒川+ギンズは、その慣れの極として位置づけられる。彼らは、我々が死へと向かう存在であるという「天命」それ自体を反転させようと企てたのだった。

## 7 自然と建築

風の気配から次の天候を読み、分厚い雪下の荷物の在処を見極めるなど、佐伯富男や他の山岳ガイドが有する卓越した能力について、インゴルド、ジェンドリン、荒川+ギンズの議論を参照しながら概観してきた。富男は幼少期からの山中の生活により、一見すると人智を超えた「勘」の鋭さを獲得するに至ったわけであるが、荒川+ギンズは「建築」という手続きを通じて、これを実現しようとした。稲垣が指摘するように、荒川+ギンズは徹底した技術主義、実験主義的な顔を持つ<sup>57)</sup>。養老天命反転地を構想したねらいについて、荒川は、哲学者の小林康夫との対談の中で次のように話す。

日本人が長いあいだ、自明なものとして使ってきた自然とか、与えられたものとか、そういうものは、一般の方々が考えているようなものじゃないんですよ、とすることを経験させる場所をつくれないうらうか、と考へた。(中略) あの公園の背後には、養老山脈がすぐ横にあるわけです。だけど、そこへ行ったら、いままで自然だと思っていた養老山脈より、意外にも私たちがつくっている小さな山のようが自然に見えるんです。見えるんじゃない、使用できるんです。なぜなら、私たちがつくっている自然は、我々のサイズで、使用可能だからなんです。一般に日本人は、手に負えないものを自然という。その最も手に負えない典型が富士山です。結果、あれは神様だと思っちゃった。だから、ああいうものを一度、引きずり降ろす行為ということですね<sup>58)</sup>。

荒川の自然への眼差しは独特である。「自然」と「建築」は、荒川にとって対立概念ではな

---

56) 小野 (2005) が指摘するように、ギブソンのアフォーダンス理論に強い関心を示していた荒川が多用する「気配」という語には、身体と環境との動的かつ精密な相互作用をもとに本論文で言及してきた「勘」や「風」というモチーフとも親和的である。「気配」という語句と勘との関連や相違については、稿を改めて論じることしたい。

57) 稲垣、2019、203-205頁

58) 荒川+小林、2015、169-170頁

い。荒川も確かに、「注意の教育」を「建築的手続き」を通じて実現しようとした。しかし山には入らず、いわば山を造ったのであった。

過酷な環境下に生まれ、その中を生き抜き、卓越した「勘」を身につけた佐伯富男。風捲く天候世界に生きる住人は、風にさらされ、その風を感じ生きることによって、身体感覚を研ぎ澄ませる。荒川+ギンズの建築物もまた、「勘」を研ぎ澄ませ、環境の「気配」を感受するための1つの手続きとして機能する作用を含み持っている。「人間を超える」という彼らの企ての延長線上かその途上には、風から嵐の予感を読む卓越した「勘」を有し、南極などの極地でも生き残る、山岳ガイドの身体性が、確実に位置づけられるはずである。

#### 【参考文献】

- 荒川修作+マドリン・ギンズ (著) 工藤順一+塚本明子 (訳) (1995). 『建築——宿命反転の場 アウシュヴィッツ——広島以降の建築的実験』水声社.
- 荒川修作+小林康夫 (2015). 『幽霊の真理 対自由に向かうために』水声社.
- Bradley, C. (2002). Travelling with Fred George: the changing ways of Yup'ik star navigation in Akiachak, western Alaska. *The earth is faster now: indigenous observations of Arctic environmental change* (eds) I. Krupnik & D. Jolly, 240-265. Fairbanks, Alaska Arctic Research Consortium of the United States.
- 古川不可知 (2020). 『「シェルパ」と道の人類学』亜紀書房.
- Gibson, J.J. (1978/2005). *The Ecological Approach to Visual Perception*, Psychology Press. New York. (古崎敬・古崎愛子・辻敬一郎・村瀬旻 (訳) (1985). 『生態学的知覚論』サイエンス者)
- Gendlin, E. T. (1981/2003). *Focusing [2nd]*. New York: Rider Books. (村山正治・都留春夫・村瀬孝雄 (訳) (1982). 『フォーカシング』福村出版.)
- Gendlin, E. T. (2017). *A Process Model*. Northwestern University Press. Evanston.
- Gendlin, E. T. (2017). Arakawa and Gins: The Organism-Person-Environment Process, *Saying What We Mean*. Northwestern University Press. Evanston. 164-172 (岡村心平 (訳) (2017). 有機体——人間——環境プロセス. 『関西大学東西学術研究所紀要』50, 381-393.
- 稲垣諭 (2019). ARAKAWA+GINS「から／に向けて」の「社会／技術」批判. 『22世紀の荒川修作+マドリン・ギンズ』フィルムアート社, 192-210
- Ingold, T. (2000). *The Perception of the Environment: Essays on Livelihood, Dwelling and Skill*. Routledge.
- Ingold, T. (2007). Earth, Sky, Wind and Weather. *Journal of the Royal Anthropological Institute*, 13 (s1) s19-s38. (インゴルド, T. (2017). 「大地、空、風、そして天候」『現代思想 3月臨時増刊号 人類学の時代 古川不可知 (訳) 45(4): 170-191)
- Ingold, T. (2011). *Being Alive: Essay on Movement, Knowledge and Description*. Routledge.
- 伊藤正一 (2019). 『定本 黒部の山賊 アルプスの怪』山と溪谷社.
- 黒田亮 (1980). 『勘の研究』講談社学術文庫.
- Madeline Gins and Arakawa. (2002). *Architectural Body*. Tuscaloosa: University of Alabama Press. (河本英夫 (訳) (2017). 『建築する身体 人間を超えていくために』春秋社.)
- 三村尚彦 (2015). 『体験を問いつづける哲学 第1巻 初期ジェンドリン哲学と体験過程理論.』ratik.

- 三村尚彦 (2017). 「建築する身体」と「ランディング・サイト」. 『関西大学東西学術研究所紀要』第50輯, 69-89頁
- 三村尚彦 (2018). 詩人の felt meaning: 荒川修作、マドリン・ギンズの遺構研究にむけて. 『関西大学東西学術研究所紀要』第51輯, 79-100頁.
- 諸富祥彦・村里忠之・末武康弘 (編) (2009). 『ジェンドリン哲学入門 フォーカシングの根底にあるもの』コスモスライブラリー.
- Nelson, R.K. (1983). "*Make prayers to the raven's Koyukon view of the northern forest*. Chicago" University Press.
- 西堀栄三郎 (1958). 『南極越冬記』岩波新書.
- 岡村心平 (2017). 交差と創造性——新たな理解を生み出す思考方法——『人間性心理学研究』35(1), 89-100頁.
- 岡村心平 (2019). 「臨床的手続き」としての建築とその使用法. 『22世紀の荒川修作+マドリン・ギンズ』フィルムアート社, 139-153頁
- 小野暁彦 (2005). 気配の機能 まだ見ぬ機能主義へ『水平通信』1, 64-71頁
- 佐伯富男 (1969). 『山と雪に生きる』あかね書房
- 佐伯富男 (1973). 『あるガイドの手記 (山岳名著シリーズ)』二見書房
- 佐伯富男追悼集編集委員会 (編) (1995). 『芦峠の自然児 トンコ 佐伯富雄追悼集』講談社.
- 「立山ガイド 芦峠トーク LIVE 配信 !!」2020年6月21日配信 (主催: 芦峠寺活性化協議会)  
<https://www.youtube.com/watch?v=riCxjVf9avo> (2020年10月20日確認)
- <https://www.youtube.com/watch?v=IrsjES277i8&t=1653s> (2020年10月20日確認)
- <https://www.youtube.com/watch?v=UCE43aOqk8A&t=1s> (2020年10月20日確認)

